
蛍光灯

N.T

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蛍光灯

【コード】

N0882V

【作者名】

N・T

【あらすじ】

『蛍光灯』は、皆を守るために。

また笑いあえるために。次の夏を、迎えるために。

それと闘いつづけた。

鍵^キは、皆を守るために。

また笑いあえるために。次の夏を、迎えるために。

その苦しみに耐え、生きようとした。

これは、『蛍光灯』の、そして鍵^キの、最後の夏。

最後の夏の始まり

「おい、早くしろよ！」

「ぐだぐだ言ってるなら見張り。ちゃんとしろ」

キーを叩く音がかすかに響く。一分後、モスキート音ぎりぎりの電子音が三秒鳴った。パソコンの画面に解除の文字が現れる。細い息をはいて、鍵がパソコンを片付ける。

「……運んでくれ」

「おい、鍵^キ。お前また力仕事だけ俺にさせるって……すまん、大丈夫か？休んどけ」

鋼鉄の扉に寄りかかった鍵。火照る身体をそれで冷やす。ずるずると床にへたり込んだ。

「鍵？薬は」

「別に、いらない」

「どこだって。言ってくれよ」

「ない。何でも、ないし」

頭を振る鍵。がたいのいい男は鍵の額に手を当てた。結構いいや、相当熱い。

「何がなんでもない、だよ。あと少しだからもうちつと辛抱してくれ」

数分後、男は戻ってきた。力が入っていない鍵を軽々とその背に負い、部屋から出る。

「鍵、最後の仕事。あれを頼む」

鍵はどこからか小さく薄い箱のようなものを取り出した。

「今回……いつものじゃないからな。気をつけねえと、C4だぜ」

C4。プラスチック爆弾の一種で、破壊能力が著しく高い爆弾である。通常、小型爆弾として使用するものではない、が。

「トラックに乗り込んだら爆発させるから。逃げろ」

「はい、了解」

二人が配送用に見せかけたトラックに乗り込んだとき、まだ警備は眠ったままのようだった（改良した催眠スプレーのおかげだろう）。男が座席に鍵を座らせるが、鍵はもう自分の身体を支えられないらしく、倒れこむ。

「しっかりしろって、鍵！」

「大丈夫、だって」

小さい、ただ2つだけのボタンがついたスイッチを押す。

ピッ

轟くような爆発音。警備が気づいた。まだ麻酔の抜けないままふらふらと、スプリングラーでずぶ濡れになりながら警備員がそこにたどり着いたとき。ぐにやり、異様に曲がった扉があった。部屋の中には、置いてあったはずの大量のそれがない。

そのころトラックの中では、男が運転しながら鍵に必死で話しかけていた。

「鍵、しっかりしてるよ。帰るまでちゃんと起きてろ。おい、鍵？」

玉のように浮かんだ汗が流れ落ちる。荒く熱い吐息が吐き出される。意識が、泥の中に沈んでいく。

「……………る、せ、」

視界がブラックアウトしていく。視野が狭くなる。落ちる、落ちる

「おい！」

現状（1）

「なあ、鍵はまだ寝てんのか？あいつがいないせいですぐに壊滅できない」

「すぐにつて、あなた。鍵にばつか頼ってないで自分もピッキングの練習でも、したら？用具は鍵が用意してくれてるでしょ。鍵には休養が必要な」

「この前もそう言っただろ。オレはカギ班じゃねーよ」

起きて早々に鍵が聞いた話は、どうやら自分に関する話のようだった。ベッド脇の時計を見やれば、とうに昼を回っている。身体を起こしかけて、やめた。頭がはつきりしない。意識を失ったのは…
…そう、トラックの中だ。

「鍵、起きた？体調はどう？体は動く？喉渴いてない？」

「……起きてすぐ質問攻めかよ、結タイんん、水欲しい、かも。今、何月何日」

「鍵だつて似たようなもんよ。はい、水。今日は、あなたが意識を失ってから二日後。簡単な食べ物あるけど、どう？」

鍵はコップを受け取り、水を口に含む。喉を伝い降りていくそれは、まだ体に残っていた熱を取ってくれた。息を一つ吐くと、コップをサイドテーブルに置く。

「いや、いらぬ。それより、うまくいった？」

「もちろん。鍵がいたんだから。集計はしてないけど、やっぱり一般家庭を狙うのとは違うわ」

渡されたのは白い錠剤。渋い顔で、苦々しくこう言われる。

「常備しときなさいって言ったのに、守らなかつたわね鍵。あれほ
ど言ったのに、わかつてるの？あなたは」
「悪かつたよ」

残った水で錠剤を流し込む。

「俺はこの組織で大事な戦力。ハッキング、クラッキングなんか

できる人間。鍵の字を持つ組織の幹部だよ。そんなくらい分かってる」「分かってない」

二人の間に、気まずい沈黙が流れた。

「とりあえず。俺ちよつと出てくる。夜には帰ってくるから」

「ちよつ……！」

鍵はベッドからさっさと立ち上がり、服を着替え始めた。結今まで話していた鍵の姉は、気を使ったのかどうか、部屋から出て行った。

濡れたシャツを脱ぐと、汗をかいた肌がさらされる。無数の手術痕。鍵の身体に異常が発見されるたびに繰り返した証だ。鍵自身は気にせず黒の長袖ワイシャツに着替え、黒のスリムパンツをはく。薄手の黒コートを、袖を通さずに羽織り、襟を立てる。最後に、黒の手袋。

「いつてくる」

玄関で煙草をふかしているがたいのいい男に一言いい、外へと出て行った。

「鍵は、どうしたの。ねえ、誰か見なかった？」

結は、鍵を捜していた。

(また、治ってないのに出てって！)

「あ、オレ見ましたよ。買い付けに行くみたいでしたけど。結姉さん、聞いてなかったんですね」

もう外に出してしまったのか。

「何や、また鍵が外に出たんか？まだ熱も下がったらんのに、ようやくやるわ」

奥から色黒の男が出てきて、関西弁で喋った。字は医^{ドクター}。名のおり医者である。

「ま、あいつも体力の限界はしつとるやろうし。心配せんでも帰ってくるわ、きつと。のんびり待ちやー」

「医、あなた自分の患者が心配じゃないっていうの!?!」

「別にー。そんなこと言わん。わてかて医者や。ただ、鍵ももう1
6やで？結が大事にすんのも分かるつもりやけど、鍵も息詰まるで
結は、黙った。」

現状（2）

「ただいま」

結局鍵は日暮れ頃帰ってきた。商人から買ったのか、大量のロブを携えて。

「これ、納戸に運んで」

こころなしか疲れたような声だ。表情も少し、固かった。そんな鍵に、ドクターが声をかける。

「鍵」

ひくり、と鍵の肩が揺れた。

「さ」

「後生だから、注射はやめてくれ」

「ん？」

「どんな治療も受ける、受けるからちゆ、注射だけは勘弁して」

「いや、そんなんやなくて」

鍵の肩に手を置こうとした医が手を伸ばすと。

トン

鍵は中二階の手すりに飛び上がった。実に3メートルほどの跳躍。

「そーいえば、鍵って注射嫌いだよな」

「どんなにつらいときも、注射、って聞くと逃げ回るらしいぜ」

「点滴も同じはずなのに、それはいいんだと」

「つくづく不思議だよな」

テレビを見ながらくつろいでいたメンバーが、2人のやり取りを横目に呟いた。

「なあ、わたの話を」

「あーっ、わーっ、何も聞こえません」

耳をふさぎながらどんどん階上へ飛び移る鍵。まるで兎のようである。にもかかわらず、肩に掛けただけのコートは落ちる素振りも見せない。これは鍵の7（？）不思議の一つである。

「聞けーっ！」

医が叫んだ、その時。

「どこ行つてたのよ！この馬鹿鍵！」

「うわっ」

今度は鍵が、落ちてきた。

説明しよう。人間が仮に13階から落下したとき、衝突するのにかかる時間は約2秒だそうだ。この説明をしたのには訳がある。

鍵が落ちてきたというのに、誰も動こうとしなかったからだ。別に薄情なわけではない。逆にそうしなければならぬのだ。なぜなら。

タアン

「あつぶねえ。結、仮にも俺ら姉弟だろ！」

「五月蠅い！馬鹿の言うことなんか知らない！医の話くらいまともに聞いたらどうなの！3時から幹部会なのよ！きつちり来なさいね！そんなに元気なんなら、心配なんかするんじゃないよ！」

鍵は無傷でそこにいた。平気な様子で服のほこりをはらっている。結の音が吹き抜けの建物にとてもよく響いた。こだまのようにうわんうわんと鳴っている。

「……とりあえず、医。すいませんでした」
軽く頭を下げて謝る鍵。結のおかげで、躰だけはきちんとしている。

「いや、べつにええで。ま、代わりゆうたら何やけど」

「は？」

「治療中やつてのに勝手に出てった罰バチや。点滴してもらおうかの」

「……幹部会は」

「そんな可愛い目エしてもあかんで。幹部会にも出てもらう。まあ、叩かれにいくよーなもんやな」

エレベーターに乗り込み、最上階のボタンを押して医は首をすくめた。そんな彼に対して鼻で笑う鍵。

「人材育成をろくに行わず、このごろは幹部会にもほとんど顔を出

ささい、つてか？もともと若すぎるんじゃないかって声もあるしな。つたく」

くだらねえ。

鍵はさして興味がないかのようにそう言った。

自分の部屋に医を招きいれ、そのまま鍵はベッドに倒れこんだ。

中指の先を軽く噛んで手袋を取り、あとはほとんど動かず虚空を見つめている。

「触診するわ。てか、襟元緩めや」

言われて、無造作に襟元を緩め、細く息をはく。医はひととおり鍵の身体を診たあと、これ見よがしにため息をついた。

「まあええわ。点滴うつで、少し休みや。安静にしとかなあかんのに動いたんやでな」

「はいはい」

「鍵、いい加減真面目に仕事をしてくれないか。一ヶ月に一度しか働かないようじゃあ困る」

「そっぴやあ、教えてるのか？ずっともたもたしてばっかだぜ、カギ班の連中」

「ハッキングだってそうだな。いつまでたっても、警察のネットワークをかいぐるので精一杯じゃないか。システム構築も遅いし」

鍵に投げ捨てられる言葉には、いちいち棘がついている。わざわざ拾おうとも思わないので、とりあえず痛くも痒くもない。

「このところは幹部会にも顔をみせない。自覚を持ってくれ」

「まったく、鍵の師匠はこんなじゃなかったのにな」

「師匠はもう関係ねえだろ。あっち側の人間だぞ。そんな奴と比較すんな」

いかに冷静に振る舞っても所詮は子供だな。

そんな空気が流れる。

「鍵、君の能力も、才能も、私たちは買っているんだよ。あとは、

経験を積まないかね」

「そうそう。幹部なんだから、大人の対応を、な」

「やっぱりまだ早い。鍵は今月でやっと一六なんだろう？」

好き勝手言われている当の本人はというと、そ知らぬ顔で目の前のコップで手遊びをしている。しかしテーブルの下に隠された右手は、血が滲むほど強く握られていた。

「ちよつと、待って。あなたたちにそんなこと言う資格、ないわ」

弟の様子を見かね、結が口を挟む。

「鍵はこの中の誰よりも一生懸命やってる。ここの資金を作ってるのは誰よ？ 鍵じゃない。戦闘術を教えるのは誰？ 鍵じゃない。子供たちに勉強を教えるのは？ 子供たちの遊び道具作ってるのは？ 物を直してるのは？ ここの試験を行ってるのは？ 実際アレを盗りに行くのは？ 全部鍵じゃない。全部全部、鍵に抱え込ませて。ただでさえ身体が弱い上にそんな無理ばかりさせてるあなたたちに非があるはずよ！ あなたたちが幹部だなんて、信じられない」

「結」

諫めるような口調で、医が結をとめた。

「えろつ、すんませんなあ。点滴が切れそうなんやわ。ほやで、鍵とわて、先に抜けさしてもらいますー」

鍵の腕を引っつかみ、立たせ、引きずるように連れ出す。誰も否とは言わなかった。いや、言えなかった。まるで始めからそう決まっていたかのように過ぎ去ってしまったから。

現状（3）（前書き）

いい加減、この一ヶ月更新の状況を打破しなくてはいけません。
今日から本気出します。というか、テスト終わったら本気出します。

現状(3)

「鍵、右手。血イ出とるやんか。気にせんとけえゆうとるのに」

食い込んだ爪に血がこびりついている。ペロと鍵はそれを舐め。

「別にこの位。なんてことない。洗つときゃ治る」

「結が心配するで」

「……言うなよ」

「明日1日寝とつたら、考えたつてもええで」

エレベーターが着く。扉が開くと同時に苦虫を噛み潰したかのごとく渋い表情で足を速める鍵。楽しそうな顔で、しかし医は追いついた。

「んー？」

鍵の顔を覗き込む。

「分かった、分かった。誓います……明日はどこにも行きませんが、無茶もしません。これでいいかよ」

左手を垂直に上げ、鍵は誓いをたてる。

「よっしゃ、言つたな」

カギを開ける。ほとんど何も無い、簡素な部屋。

その部屋の主である鍵は慣れた手つきで隠されたクローゼットから服を取り出し、着替えを始める。

「あれ、いつもの」

「洗つたらしいで。洗い替えも今はない。まあ、なんかそれっぽい
の着ときゃ」

「……ふーん」

適当に鍵は奥のほうから服を引っ張り出す。それを着て、自身の格好を確認すると、寸の間顔をしかめてベッドに腰を下ろした。半袖半ズボンから伸びる長い手足が、不機嫌そうに組まれる。

不思議そうな顔をして鍵を見る医に、見られる側がなんだよと問いかけると。

「いや、なあ。長年つきあってるし、見慣れとるつもりやけど、鍵
って」

「つくづく半袖短パン似合わないのね。入院服も微妙よ」

「結が引き継ぐなよ」

医の後ろからひよっこり顔を見せる結。苦笑いをして、医は。

「いんや、結の言うとおりやな。鍵はほんまに似合うのないなあ。

見たことあらへんけど」

けらけらと笑いだす医を冷たく見返し、諦めたように言う。

「はいはい、どうせ俺は小さい頃から長袖長ズボンしか着たことね

ーよ。悪かったな」

ひいひい言いながら笑いを収める医。鍵をベッドに倒し、布団を

かけた。半ば乱暴に。

「まあ、約束どおり、寝とき。朝はわてがご飯持ってくるまで起き

んなや」

「わーったわーった」

落ちて着いて布団を整え、目を閉じる鍵。

1、2、3秒後。

スー スー

「……なんで、必ず1、2、3秒後には寝られるんやろうか」

「まあ、七（？）不思議の一つだから」

そんな言葉を残し、医と結は去っていった。

真っ暗になったはずの部屋に、一つの光が溢れる。それを持った

人物がきよるきよる辺りを見回し、すっぽり布団の中に入っていく。

そう、鍵だった。光は携帯電話のそれである。

手馴れた様子でボタンを押し、通話ボタンに手をかける。

待つこと5コール。

『鍵、夜中に何よ？』

鍵の頬が思わず緩む。

「どーせ起きてたんだろ。いつ電話したって一緒じゃねえか」

『今は起きてたからいいけどね、寝てたらどうすんの。鍵はかよわ

い女の子を、夜中に電話で起こすわけ。亭主閉白ぶるのね」

「綾のどこがかよわい女の子だ。噂は聞いているんだぞ。つい最近

」

『あの借金取り10人殴り倒したやつ？弱かったもん、鍵に比べたら』

「俺と比べること自体がおかしいんだよ。綾だつて俺に一度も勝つたことないのに」

『むー。そういえば、何の用？鍵が用もなく電話してくることなんて、ないでしょ』

「That's right! 鋭くなつたな。初めて会ったときは裏も表も知らねえ、ただの天然だと思つたんだが」

『ろっ、6年前のことを蒸し返さないでよ！鍵だつてあ那时候、真っ青になつて立ち上がれもしなかつたくせに』

「とにかく用件だが」

『いきなり真面目にならないでよ』

「綾の地区で、寝たきりになつてたり、元気だつたのに今は具合が悪そうなやつとかいないか？」

『またそれ？んー、多分、いない。ここは最下層だからね。上流家庭の人からもそんなことは聞かないな。でも、中流ならいたみたい。風のうわさだけど』

「それを言うなら風のたより、だ。学校行ってない俺よか馬鹿つて、どうよ」

『あのねえ、気まぐれで受けたMIT（マサチューセッツ工科大学）の試験、トップ合格だった人がそんなこと言わないでよ』

「しかもあれ、ノー勉だったしな」

『……それは聞いてない』

「前日、急に仕事が入って結局勉強しなかった」

『へえ。！そつだ。報酬は？情報あげたんだし』

「は？」

鍵は笑顔から一転、呆けた顔になる。

『あたし、情報がほしいの。情報屋の鍵なら何か知ってるでしょ』
たまゆら、考え。

「ほしい情報による」

『鍵はもちろん知ってるよね。《蛍光灯》って組織のこと』

黙りこんだ。何を隠そう、その組織は。

『あたし、そこに入りたいの』

「駄目だ」

『何だよ』

その、組織は。

「……じゃあ、綾が俺の動きを封じられたら教えてやってもいいぜ？それとも、一億くらい集めてくるんだな」

『いつ叶う話よ！』

「基礎くらいなら教えてやる。それが等価だからな。《蛍光灯》っていうのは蛍光灯しか狙わない風変わりなテロ組織だ。できたのは6年前。初めは民家から蛍光灯を盗っていくだけだったのが、今では工場のシステムをハッキングして営業妨害を繰り返し、電気店なんかの倉庫、金庫から根こそぎ持っていく始末だ。2日前……じゃなかった、3日前の事件も知ってるんだろう？」

『うん。出荷前の蛍光灯を、狙われてるからってわざわざドデカイ金庫に入れたのに、あっさり侵入されて持っていかれたやつでしょ』

「それ。警察も張^{サツ}ってたのに易々と持っていった。ちょうどそのとき、警察の特殊回線にハッキングした奴がいたそうだ。サイバー警察が気づいたときには、もうすでに消えてた。魔法使い（ウィザード）級のハッカーを味方につけたんじゃないかとさ。あとカギ師。開けられたカギはピッキング不能とまで呼ばれていたらしい」

『ふーん。　ねえ、彼らが蛍光灯を盗む理由って、何なんだろうね？』

ふ、と、鍵は6年前のボスの声を思い出した。

「昔の話だけだな、《蛍光灯》の一員に会ったことがある。そいつはこう言ってた。　大切な人を守るためだって」

「……鍵？どうしたの、なんか、寂しそうだけど。もしかして、辛い？」

確かに、体調も良いとは言えなかった。頭が痛い。でも、それ以上に、この話をやめにしたかった。

「悪い。頭痛くなってきた。とにかく《蛍光灯》に入る方法が知りたいんだったら俺に勝つか、一億な」

「うげー。まだ言うの。じゃあ、体、気をつけてよね。また今度！おやすみ」

「ん、おやすみ」

ツー ツー ツー

再び真っ暗になる部屋。現在時刻、4時15分。カーテンを少し引いて外を覗けば、白んだ空が見えはじめていた。一人ぼそりと、鍵が呟く。

「《蛍光灯》は、俺らだつてのに」

某所

「監視カメラにも、映像は残っていませんでした。やつら、どんな手を使ってるんだ……？」

「き、……」

「え、なんですか。key?カギ？」

「……」

「答えてくださいよう。あなたが元『蛍光灯』であることはばれてしまっているんですよ」

「知らない」

「そんなはずはないでしょう。何故ならば、今まで始末してきた連中と違って、あなたは『蛍光灯』に深く関わりすぎている。しかも、どうやら忘れてもいないようじゃありませんか」

「知らない！」

「へえ。しらを切り通すおつもりで。構いませんよ?別に、ね」

「っ、どんなことをしても吐かせるってか。でもなあ、無理だと思っぜ？」

「無理ですかー。さあ、どうでしょうねえ？」

「『蛍光灯』にや、俺でもかなわねえ奴がいる。今でもきつと成長してるぞ」

「ほう?そういう人がいるわけですね。天才とうたわれたあなたも敵わない人がいると？」

「ああ、いる。いるから、もう、手を出すな」

「……はっ!先に手を出したのは『蛍光灯』、私たちじゃありません。Oculum pro oculo et dentem pro dentem ってね。目には目を、歯には歯を。でしょ」

「違うな。先に手を出した、いや、きつかけを作ったのはあんただちだよ。あんたらは、『蛍光灯』にとつて大事なやつを蝕んでいる。その苦しみが消えない限り、絶対に『蛍光灯』は行動をやめない」

「やめない。ほう。その大事なやつという人を、どうにかしてしまえば」

「やめろ！ あ、っ」

「殺しますかね」

「やめて、やめてください、あ、あ、ごめんなさい、やめてください、殺さないでください代わりに俺を殺せばいいからあいつだけはやめてお願いしますお願いします」

「惨めだとか、思いませんか」

「思いませんだから、だからやめて」

「これはいい。あなたを苦しめるものがあるとは、思いませんでしたよ。いい玩具おもちゃを見つけた」

「やめ、て、ください」

「蛍光灯ねー、ネーミングセンス最悪ですね。誰がつけた名前です？」

「当時の新聞記者がそう呼びだしてからというもの、広まったものだそうですよ」

「君には聞いてないよ」

「は、すみません」

「しっかしまあ」

「はい？」

「実際に土下座してもらったのは初めてですよ。この気位の高い人から」

「そう、なんですか」

「今まで、どれだけ拷問を繰り返しても許しも請わず、強情に気丈としていた彼が。こんなになるほどの人とはね。　　気になります」

「調べますか」

「やっっておいてください」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0882v/>

蛍光灯

2011年10月29日16時08分発行